



坂屋敷庚申堂



万徳寺太子堂

## せと 歴史と文化財を知る見学会 「瀬戸の堂宇をめぐる」

主催：せとモノがたりの会・瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和6年3月20日（水・祝）

見学コース：①（北コース）

（予定時間） 午前9時 文化センター北駐車場出発  
9時20分 坂屋敷庚申堂（掛川地区）現地説明  
10時00分 菩提寺山門（品野地区）現地説明  
10時50分 小金観音堂（水野地区）現地説明  
12時00分 文化センター北駐車場到着・解散

②（南コース）

午後1時30分 文化センター北駐車場出発  
1時40分 万徳寺太子堂（赤津地区）現地説明  
2時10分 山口観音堂（山口地区）現地説明  
2時40分 東福寺観音堂（菱野地区）現地説明  
3時10分 地藏堂（雨降り地藏）（本地地区）現地説明  
3時40分 十三塚地藏堂（瀬戸地区）現地説明  
4時00分 文化センター北駐車場到着・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきもの生産  
の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

本地大塚古墳（西本地町2丁目）

宮地古墳群（上之山町2丁目）

広久手30号窯跡  
木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県  
木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県

古瀬戸瓶子（寺本町）

陶製狛犬（深川町）国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】（東白坂町）国  
永享年銘梵鐘  
聖徳太子絵伝（塩草町）

定光寺本堂（定光寺町）国  
織田信長制札（窯町）  
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]  
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（鳳山町）国  
源敬公廟（定光寺町）国  
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町）  
石造地藏菩薩立像（片草町）

大目神社本殿（巡問町）国  
陶質十六羅漢塑像（寺本町）  
六角陶碑（藤四郎町）

旧山繁商店（仲切町・深川町）国  
瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国  
陶製梵鐘（深川町）

|     |      |      |         |       |
|-----|------|------|---------|-------|
| 古墳  | 5世紀  | 飛鳥   | 須恵器     | 奈良    |
|     | 6世紀  |      |         |       |
| 平安  | 7世紀  | 鎌倉   | 灰釉陶器    | 室町    |
|     | 8世紀  |      |         |       |
|     | 9世紀  |      |         |       |
|     | 10世紀 |      |         |       |
| 南北朝 | 11世紀 | 戦国   | 山茶碗・古瀬戸 | 安土・桃山 |
|     | 12世紀 |      |         |       |
| 江戸  | 13世紀 | 近代   | 大窯製品    | (明治)  |
|     | 14世紀 |      |         |       |
| 近代  | 15世紀 | (大正) | 連房製品    | (昭和)  |
|     | 16世紀 |      |         |       |
| 近代  | 17世紀 | (昭和) |         |       |
|     | 18世紀 |      |         |       |
| 近代  | 19世紀 |      |         |       |
|     | 20世紀 |      |         |       |

717-49（天平年中）（伝）菩提寺創建  
740（天平12）（伝）東福寺創建

12世紀末～16世紀 菩提寺遺跡（採集遺物年代）

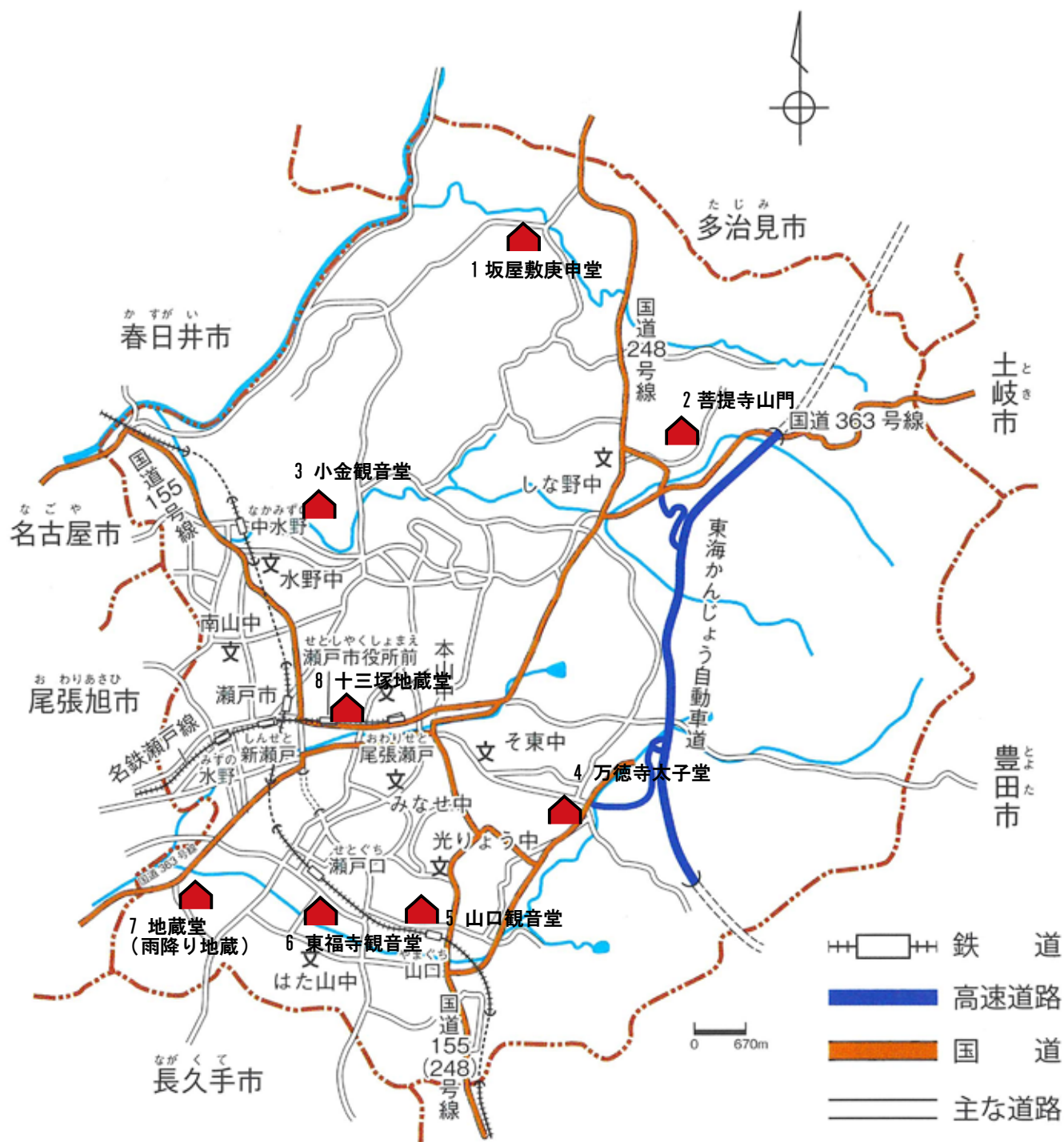
1288（正応元）万徳寺開山（三河国越戸より移転し太子堂建立）

1516（永正13）東福寺火災により全焼  
1532-55（天文年間）小金観音堂創建（現存建物は明治か）  
1556（弘治2）織田信長・信行の戦い（稲生の戦い）  
1584（天正12）小牧・長久手の戦い  
1610（慶長15）名古屋城築城による石垣普請

1799（寛政11）山口観音堂創建  
1819（文政2）坂屋敷庚申堂再建  
1877（明治10）坂屋敷庚申堂再建（現存）  
1887（明治20）山口観音堂本泉寺境内へ移築（現存）

1935（昭和10）万徳寺太子堂再建  
1971（昭和46）菩提寺山門再建

## 地域の堂宇 令和5年度看板設置個所位置図



令和5年度看板設置「地域の堂宇」

## 1 さか 坂屋敷 庚申堂 こうしん

下半田川町坂屋敷の旧道横の丘に庚申堂がある。現在は利用されていないが、「おばあさんたちがこのお堂に集まってご詠歌を唱えていた」ことを記憶する世代が、令和6年現在は町内にはまだいる。お堂の前に、女人講中と刻まれた石仏が二体あり、それぞれ、天明7（1787）年と文政2（1819）年の銘が入っている。庚申講とは別に女性どうしが集まって信仰した日常生活の情報交換をする女人講が行われていたと推測される。庚申の日に五目飯を供えてお勤めをする庚申講があったことも伝わっている。定光寺町でも庚申塔に味飯を供えてお参りした。

町内には庚申堂の他に庚申碑が2基ある。庚申堂から南西に150 mほど離れた林道わきの庚申碑（西山の庚申碑）に明治12年の刻銘があることから、このお堂も同時期に建てられたとする説があるが、堂内にある2枚の棟札によれば、文政2年に庚申堂再建、昭和40年に修理されたことが分かっている。したがって、庚申堂の創建は文政2年以前の江戸時代ということになる。なお、もう一基の庚申碑（いしょうじの庚申碑）は、庚申堂から約500 mほど東の林道わきにあり、これには萬延元（1860）年の刻銘がある。

現在の庚申堂は明治10（1877）年前後にコレラ・はしかが全国的に大流行した折に村を疫病から守ってもらうために建てられたものと伝えられている。2間×2間の側柱建物で、屋根は寄棟となっている。もともとは萱葺だったが、平成9（1997）年にトタン葺きとなった。現在の庚申堂の東側には礎石らしき石材や平場があり、江戸時代以前にも庚申堂の建物がこの地に建っていた可能性が高いと思われる。



庚申堂



女人講中と刻まれた石仏



文政2(1819)  
年の棟札



庚申信仰は、中国道教の説く「三尸説」<sup>さんしせつ</sup>をもとに、仏教、特に密教・神道・修験道・呪術的な医学や、日本の民間のさまざまな信仰や習俗などが複雑に絡み合った複合信仰である。

干支で、庚申の日は 60 日ごとに来るが、この夜に人間の体の中にいる三尸虫<sup>さんしちゅう</sup>は寝ている間に体から脱け出して、天帝にその人間の行った悪行を告げに行くという。寿命をきめる天帝は悪いことをした人に罰として寿命を縮めるといわれている。ところが、三尸虫は人間が寝ている間にしか体から脱け出ることができないので、庚申の日には、信者は会食談義をして徹夜をした。これが庚申講のはじまりとされ、眠らずに庚申の日が明ける次の日が来るまで待ったということから「お日待ち」と呼ばれるようになった。下半田川集落では昭和 20 年代までは地域の人が集まって「お日待ち」をやっていた。

また、青面金剛はこの三尸虫を喰ってしまうので、庚申講でこの青面金剛を本尊として拝むようになった。一晩一心に願い続ければ、病魔の退散、延命長寿もかなうとされる。町内の庚申堂の中に厨子が二つある。この中に青面金剛を描いた小さな掛け軸が納められているが、右側の掛け軸はすでに破損している。



庚申堂東側の礎石とみられる石材と平場



庚申堂内の様子

## 2 菩提寺山門<sup>ぼだい</sup>

尾張城東西国三十三観音 第二十九番札所。天台宗寂場山菩提寺。菩提寺は 160 年前、養海上人によって開基された。本堂は千手観音菩薩を奉り、不動明王・毘妙門天・弘法大師・役行者<sup>えんのぎょうじゃ</sup>が安置されている。本堂東には、出雲大社より招神の神「えびす」様を迎えお奉りしてある。菩提寺は国内でも有数の霊山で、加持祈禱の道場でした。昭和 4 (1939) 年に本堂が焼失し、今の本堂は昭和 36 (1961) 年に再建された、菩提とは「正しく最上の覚り」という意味である。参道途中の山門には阿形・吽形<sup>あぎょう うんぎょう</sup>の一对の仁王像がみられ、昭和 46 (1971) 年に再建されている。

張州雑志には、「当寺ハ行基大士ノ開基、華嚴ノ道場也。行基大士中品野鳥原ノ岩窟 (岩屋堂) 二間棲ノ時… (中略) …千手千眼ノ尊像 (千手観音菩薩像) ヲ彫刻アリテ、是ヲ安置セラル」との行基伝説が載っている。

寺伝では、天平年中 (729 ~ 749) に創建された華嚴宗の寺とされている。その一方で、750 年頃に養海上人が創建したお寺とも伝えられ、参道石段の右横にある石碑「東照上人塔」には養老年中 (717 ~ 724) 当寺の建立と彫られている。

境内には 88 ケ所の平場がみられ、中世の 12 世紀末 ~ 16 世紀の沢山の遺物が採集され数々の宗教施設があったことが伺われる。

本堂の裏には、ツクバネガシの巨木があり、瀬戸の名木に選定されている。

### 参考文献

瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史民俗調査報告書 四 品野地区』

瀬戸市交流活力部文化課『瀬戸の魅力発見 まちめぐりパンフレット Part13 品野地区』

瀬戸・尾張旭郷土史研究同好会『郷土史研 25 周年誌』

せと・まるっと環境クラブ『岩屋堂ガイドブックⅡ改訂版』



菩提寺本堂と恵比寿社 (右)



山門の仁王像 (吽形)

### 3 おがね 小金観音堂

小金観音堂は、天文（1532～1555年）の頃に、感応寺境内の本堂より約一町（109m）あまり山上に建立され堂内に行基作と伝わる聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、不空羅索観音、如意輪観音⑤の六体を安置したと伝わっている。天文8(1539)年己亥に火災によりお堂は焼失したが、安置してあった観音六体は、被災を免れ、同年、上水野村の一色城主磯村左近により再建され、以後数回改修・再建が行われた。

尾張志には『正観音、千手、馬頭、不空羅索、十一面、如意輪⑤の六胎を安置す。行基の作といひ傳へたり。その靈驗いちじるしく感應ありしゆゑ、世に感應佛と称しけるが、やがて寺号となりしよし寺僧いへり』と記されており、当堂を所蔵する感應寺の寺号の由来と伝えられる。

現在のお堂は、感応寺墓園の頂上に建っており、「城東西国観音二十六番札所」となっており、お堂の裏には、御林方奉行所や、水野代官所で奉行職を務めた水野家の墓地があり、また、当堂を所有する感応寺には、入尾城の最後の城主を務めた水野備中守平致高の位牌が保存されているなど、水野史のなかでの出来事との繋がりを感じさせるお堂であります。（⑤観音の普門示現とは、文字、順序が異なる）



『尾張名所図会』に描かれた感応寺・小金観音堂





現在の小金観音堂



明治 45 年頃の絵葉書に写る小金観音堂

## 4 とみつか 十三塚地蔵堂

十三塚とは、死者供養、境界指標、修法壇としての列塚を築いたものをいう。一般に、十三塚は村落への悪霊等の侵入を防ぐための鎮護祈念の祭祀所と考えられ、その形状は仏教の十三仏信仰思想から得られたものと考えられている。現在は、現地に塚はみられないが、当地に伝わる十三塚落武者慰霊供養の位牌などがおさめられた地蔵堂がある。



十三塚地蔵堂の堂内



昭和 34 年に作られた供養の位牌

「十三塚」という地名の由来については諸説あるが、① 16 世紀中頃の稲生合戦の折の落武者、あるいは② 16 世紀後半の小牧・長久手の戦いの折の落武者の言い伝えがある。

#### ①織田信長と弟信行が戦った稲生合戦（弘治 2(1556) 年）にまつわるもの

弘治 2 年 8 月 24 日に信行方についた守山城主松平信貞は信長の勢力に破れて瀬戸へ落ちた。これらの落武者は、瀬戸の追分（現在の十三塚）で 13 名が自害したが、1 名をこの戦を後世に伝えるためと、墓守として品野へ逃がした。しかし、東方の宮脇にて村人に刺され、瀬戸川左岸の前田にて討ち死にをした。後に、村人はこれを哀れみ、その後落武者が自害した辺りを十三塚と呼び、8 月 24 日を供養するようになったと伝えられる。

#### ②小牧・長久手の戦い（天正 12 年 (1584)）にまつわるもの

##### 地域に伝わるむかしばなしの一つ

今から 430 年ほど前（千六百年ごろ）、長久手というところで豊臣方の軍勢 3 万が、1 万 8 千の徳川方の軍勢に後ろから攻められて、みじめな負け方をした時の話じゃ※1。

敗れた豊臣勢の侍は、てんでばらばらに逃げたそうじゃ。戦に勝った徳川方の侍は口々に、「相手の侍は、一人も逃がすな。」

と、追手を出して、くまなく探したそうじゃ。でも、豊臣方の侍の何人かは、きびしい囲みの中を逃げ出し、そのうちの十三人が何とか瀬戸まで、相手に見つからずに逃げ延びたそうじゃ。

「しっかりせよ。」

「なんとか落（お）ち延（の）びよう。」

と、お互い励まし合いながら逃げて、ようやく瀬戸にたどりついた時には、のどはからから、腹はぺこぺこ。そこで、近くの村人たちの家かけ込んで、

「食べものを少しくだされ。」

「水をのませてくだされ。」

と、口々にたのんだそうじゃ。

しかし、村人たちは、逃げてきた侍を助けたために、自分たちが徳川方からにらまれてはたまらないと考え、侍たちに食べものや水はいっさい与えず、それどころかよろいや刀を取り上げて、村はずれで殺してしまったそうじゃ。やがて、村人たちは、いつとはなしに十三人の侍のことなどすっかり忘れていたんじゃ。

数年後、村に亡霊が出たり、庄屋になった人が不思議な死に方をしたり、田んぼでは米の不作が続く、畑では野菜が取れないといった不思議なことがおこったそうじゃ。

「どうしたことだろ。」

「何のたたりだろう」

と、村の人たちは、話し合っているうちに、長久手の戦いで逃げてきた十三人の落武者の



ことを思い出し、

「あの時、侍たちにひどいことをしたたりじゃ」

と、悔んだが、今となってはどうすることもできず、せめてあの時の侍のとむらいをしようと、十三のお墓をつくり、みんなで拝(おが)んだそうじゃ。

それから後、いつの間にかこのあたりを十三塚と呼ぶようになり、八月二四日を「侍のたましいをなぐさめる日」に決め、村人たち総出で盆踊りをしたりしておまつりをするそうじゃ。

尾張のところどころに、長久手の合戦(かっせん)の話が伝わっているが、みな悲しい話ばかりじゃ。

※1 「430年ほど前」とは 天正12年(1584)の小牧・長久手の戦い

## 5 万徳寺太子堂

太子山万徳寺は浄土真宗高田派の寺院で、創建は鎌倉時代、正応元(1288)年、創建当時は「関尾山・萬徳寺」であった。

承久元(1219)年(安貞2(1228)年ともされる)に武蔵国荒木(現埼玉県行田市付近)に創建された「満福寺」は僧源海はじめ浄土真宗門徒(荒木門徒)の本寺であったが、天福元(1233)年三河で説法したさい弟子海円が越戸村(現豊田市越戸町)に留まり、文永3(1266)年に「萬福寺」(別に「満福寺」とも伝えられる)を建立、その後正応元(1288)年、当地に移転してきたものと伝えられる。そのときすでに小さな帝子堂(太子堂)があったとされている。

浄土真宗開祖親鸞聖人は聖徳太子に深く帰依され、浄土真宗寺院に多く太子堂が造られた。今村城主・松



昭和10年に建てられた現在の太子堂



松原広長寄進状(市指定文化財)

原広長が太子の縁により寺に帰依し、寛正 5（1464）年に万徳寺太子堂が建立された。

元和 2 年（1616 年）7 月 22 日、尾張藩初代源敬公（徳川義直）がご参詣になり大法会がとり行われ、これが縁となり以後旧暦の 7 月 22 日太子堂にて聖徳太子御會式（お太子まつり）が行われてきた。（現在は 8 月第 4 日曜日）



尾張名所図会に描かれた万徳寺本堂と太子堂（左手）



絵葉書に写された改築前の太子堂（左端）

太子堂は、享保 2(1717) 年に改築され、江戸時代後期の尾張名所図会によると本堂の横に茅葺とみられる小さな太子堂が描かれているが、大正年間に写されたといわれる改築前の写真には参拝用の堂が手前に写っている。現在の太子堂は、古建築研究で著名な浅野清氏の設計により、地元大工の山田鉄次郎が中心となって施工した。昭和元年から 10 年にかけて造られた（起工昭和 10 年、落慶昭和 15 年）。

本尊は秘仏・聖徳太子孝養像（16 歳像）で、重要時に御開扉されている。近年では 2011 年東日本大震災の復興祈願や、2023 年の「聖徳太子 1400 年遠忌法要」の機に行われた。本尊右脇には松原広長が四天王寺よりもたらしたとされる聖徳太子南無仏像（2 歳像）、左脇には松原広長公位牌（昭和 43 年作成）が安置されている。



聖徳太子 1400 年遠忌法要 舞楽奉納



太子まつり (8 月第 4 日曜日開催) の様子 (画像: 万徳寺 提供)



## 6 山口観音堂

山口観音堂は建設当時の棟札から寛政 11(1799) 年巳未 初冬に建立されたことがわかる。以来、天保 13(1842) 年には再建されている。

当初、現在の吉野町の奥の「おごりんさん」で親しまれる塔山城跡近くの丘陵尾根上に所在した。明治維新の神仏分離令（廃仏毀釈）の影響のためか、明治 20(1887) 年に本泉寺境内に移築された。

この堂宇の天井には、縦横それぞれ 8 枚ずつで合計 64 枚の天井絵が描かれている。天井絵は、再建当時に掲げられた。再建当時の地域の生活がうかがわれる。

本泉寺境内へ移設される前は、地域のランドマークとなり、多くの参拝者が訪れたようで、三河の国八草村（現在の豊田市八草町）の境の道標には「左 せと 右 くわんをん（かんのん）」と記されている。



山口観音堂



山口観音堂天井絵（左下：尾張万歳が詠まれた天井絵の一枚）



観音堂の室内



旧山口村・旧八草村境の道標  
（右：道標の拓永拓影）



## 7 東福寺観音堂

旧菱野村東福寺は天台宗の寺院で、古く天平 12 年（西暦 740 年）に創建されたとする伝承もあるが、寺伝では 12 世紀に開かれ永正 13(1516) 年の火災により全焼。翌 14 (1517) 年の菱野熊野社棟札銘には「別当・東福寺<sup>しゅうかい</sup> 秀海」とあり、東福寺の僧侶が熊野神社の別当を務めていたことが分かる。昭和 25 年 (1950) に無住となった。

現在は、境内の一角に観音堂、山門、石碑が残っている。山門は南側道路の拡張時道路へはみ出た部分を取り壊された。現在では高蔵寺にある天台宗別格本山圓福寺<sup>えんぶく</sup>が管理され、東島（瀬戸口・幡山・東菱野町）町内会が借用している。かつて観音堂にあった弘法大師像は仙寿寺の地蔵堂へ移され、今でも菱野祭典委員会が主催する春祭りなどを通じお護りしている。

鬼門である東北の山の上に熊野本宮が天台密教の修験道の中心であったことからご祭神の分霊を勧請奉祀し菱野熊野社として祀り、代々東福寺の僧侶によって神仏習合の形で祭祀が厳修されてきた。

中興開山の祖と云われる大阿闍梨法印秀海の名前が永世 14(1517) 年の熊野社棟札に「別当東福寺秀海」と記される。

維新の神仏分離が進み、寺の運営が困難になり、その後 50 年間は無住になり、大正 14(1925) 年、密蔵院<sup>みつぞういん</sup>から派遣された牛田法印が一時修復したが、その後 30 年経つ中で朽ち果て、本堂と庫裏が倒壊するに至り、無住寺となった。

現在は敷地の一角には滑り台など遊具も設置され、住宅地の中にあることから、子供たちの遊び場として多くの子供たちが利用している。瀬戸口駅の西に在った墓苑が移転され現北山墓苑となったとき歴代住職の墓石も移転され、墓苑の一角にあるが、永年の風雨にさらされ殆ど判読がむづかしくなっている。



かつての東福寺の建物風景（イメージ）



無住となった戦後の東福寺の観音堂と山門

## 8 地蔵堂（雨降り地蔵）

### 地域に伝わるむかしばなし

名古屋築城におけるの堀・石垣の普請は、慶長 15 年 (1610) のこと。

今から 400 年ほど昔、名古屋城をつくっているころのお話です。

ある日のこと、本地の宝生寺のお寺の下あたりで、運んできた大きな石が車から落ちてしまいました。落ちた石を車にのせようとしたのですが、「重くて運べません。」

「もう、腹が減って動きません…」と、百姓たちは汗をふきながら言うばかりで、石はどうしても、動かすことはできません。

そこで、この石は運ぶのをあきらめて、そのままにしておきました。しかし、このままでは目立つし、邪魔になるので、何とかできないものかと、庄屋山中心に相談を始めました。すると、仲間の老人が、「この石を石屋にたのんで、お地蔵さんの姿にしてもらったらどうだろう。」と、言いました。「それは、よい考えだ。」と、みんなはあいづちをうちました。

宝生寺の境内にお祀りしてあるのが、そのお地蔵さんだということです。

毎年 8 月 23 日の地蔵まつりの日に、必ずと言ってよいくらい雨が降るそうです。

そこで、人々はいつのころか、この地蔵さんのことを「雨降り地蔵」と呼ぶようになりました。

また、このお地蔵さんに雨乞いをする、雨が降ると言われています。

### 地蔵堂について

現在の地蔵堂は平成 30 年 7 月に完成し、10 月に落慶法要が行われた。その時晋山退薫式もあり、住職が 17 世俊峰弘人となった。

#### 参考文献

瀬戸市教育委員会 1982『瀬戸の石造物』

大野栄人・横山住雄 1982『尾張 雲興寺史』

幡山村誌編纂委員会 1992『幡山村誌』

瀬戸尾張旭郷土史研究同好会 2005『せと・おわりあさひのむかしばなし 雨降り地蔵』



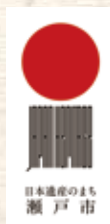
寶生寺境内の地蔵堂（左手前）



雨降り地蔵尊



瀬戸市歴史文化基本構想を推進するため、  
瀬戸市の各地区から  
歴史文化に詳しい市民が参加して  
ワークショップを行い、  
「瀬戸」の重要な文化遺産のものがたりを  
4つ選び出しました。



本事業は、平成31年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業(文化芸術振興費補助金)を活用して実施しています。

お問い合わせ

瀬戸市歴史文化基本構想を活用した  
観光拠点形成のための協議会

0561-84-1093

[瀬戸市地域振興部文化課]

せとの魅力は「せともの」だけじゃない?  
市民が推す四つのせと物がたり



新時代の  
ツクリテは  
何処に?

せと物がたり 1

尾張・三河・美濃  
三国の  
交わる場所



せと物がたり 2



美しい自然に  
親しむ



せと物がたり 3

マメ女匠

祭りと伝承



せと物がたり 4



物がたりの舞台を巡りながら、  
せとの魅力を再発見してみよう!  
新開設!「せと物がたり」はコチラから